The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国における母語力テストの開発と現状
Author(s)	富, 麗; 孫, 成志
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2012, 7, p. 239-254
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4984
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国における母語力テストの開発と現状

富　　麗[*1]
孫　成志[*2]
FU Li
SUN Chengzhi

Abstract:

Analysis on Current Status and Development of Native Language Test in Mainland China

This paper introduces the development of Chinese mother tongue language test in mainland China for the past 20 years. It first makes comparisons among tests such as “National Putonghua Proficiency Test” “Professional Chinese Proficiency Test” and “Chinese Character Usage Ability Assessment and Testing”. On the basis of investigation of currents status, the authors conclude that there are three problems the tests are facing now. First, the current tests mainly focus on some specific aspects, fields or persons, and not comprehensive enough; second, much attention is paid to the development of the testing tools, the description and assessment to the language application ability are not profound enough; third, lack of overall and systematic deliberation to the whole evaluation system of mother tongue ability.

These years, the demand for a national basic testing platform as a standard to the language ability evaluation and Chinese language tests is growing stronger as ever. With this background, the authors introduce the project “research on the standard and assessment system of national linguistic & orthographic ability” from the points of views of program design, research contents and method. This is one of the key projects of Chinese National Language Committee, in the Institute of Applied Linguistics Ministry of Education. There have been a number of different types of tests developed to investigate abilities on language performance for the particular population. The authors believe that progress has been made on the basis of the results of such trials. However, it is a good time to set up an overall systematic linguistic assessment system to Chinese native speakers.

*1　中国・教育部言語文字応用研究所・研究員
*2　大阪大学大学院言語文化研究科・博士後期課程大学院生

Keywords： mother tongue language test, National Putonghua Proficiency Test, Professional Chinese Proficiency Test, Chinese Character Usage Ability Assessment and Testing, Research on the Standard and Assessment System of National Linguistic & Orthographic Ability

キーワード： 母語力テスト，「普通話水平測試（PSC）」，「国家職業漢語能力測試（ZHC）」，「漢字応用水平測試」（HZC），「国民言語文字能力評価基準研究」

1. はじめに

近年，地球規模での人々の移動・交流が活発化しているため，今まで以上にコミュニケーション能力の重要性が認識され，言語能力を的確に測定する言語テスト開発の必要性がクローズアップされている。言語テストは，受験対象者により，母語力テスト，外国語テストと第二言語テストに分けられる。ここ数十年間，世界各国は外国語能力だけでなく国民の母語能力に関わる諸問題も重視し，母語能力の測定と評価に関わるテストが多く開発されている。例えば，それぞれ具体的な目的は異なるが，アメリカの高校生向けの大学進学適性試験 SAT（Scholastic Assessment Test）の言語の部分，イギリスの 16 歳以下の青少年向けの GCSE（General Certificate of Secondary Education），日本の日本語検定，中国の普通話[1]水平測試 PSC（Putonghua Shuiping Ceshi）などがあげられる。母語力テストは，母国の言語と文化の維持伝承を促すとともに，母語教育の発展と国民の言語文化水準の向上にも大きな役割を果たしていると考えられる。そのため，母語力テストに関する研究は，学術研究のみならず，社会の発展にも大きな意味があると思われる。

本稿では，中国国内で実施されている母語としての中国語のテスト（以下，「母語力テスト」と呼ぶ）の現状を報告し，その問題点を指摘する。また，中国国家言語文字工作委員会による「国民言語文字能力評価基準研究」プロジェクト[2]の設計と実施状況を検討することによって，中国における母語テストの現状と今後の方向性を示し，日本における母語力テストの測定と評価の議論に役立てることを目指す。

2. 母語力テストに関する先行研究

2.1. 世界の言語テスト

世界の言語テストの開発史を振り返ると，科学的な言語能力の測定方法が開発された 1960 年代初頭，言語は小さな単位に分析することが可能であるとともに，個々の単位が一定の規則に基づいて結びついた構造を持ち，その規則や構造に関する知識を獲得していることが言語能力であるという考えに基づいて，言語テストは作成されていた。それゆえ，発音，語彙，文法等の個別の知識に関するテスト項目によって分析的に言語能力を測定す

1　普通話（現代標準漢語）（プートンホア）は中華人民共和国において漢民族の共通語として作られた中国語のことをいう。

2　2011 年～2014 年中国国家言語文字工作委員会の科研の一つ。筆者の富は研究分担者である。なお，中国国家言語文字工作委員会については，中国言語文字網（http://www.china-language.gov.cn/）を参照されたい。

る「個別的要素テスト（Discrete point tests）」が，当時の言語テストの分野では主流であった。しかし，様々な分野でグローバルな交流が益々活発化してきた結果，単なる教養として外国語を学ぶのではなく，実際にコミュニケーションを行う手段として外国語を習得する重要性が認識されるようになってきた。その結果，言語テストの分野においても，1980 年代以降は，文法・語彙等についての個別知識よりも実際のコミュニケーション場面の言語活動能力を測定する「コミュニケーション能力テスト（Communicative testing）」の開発に重点が置かれるようになってきた。

ここ数十年においては，移民や外国語学習者を対象とした外国語テストと第二言語テストのほか，母語力テストにも関心が寄せられている。現在では，母語力テストは，国民の言語教育の一環として重要な役割を果たしており，政府だけでなく社会全体において広く認められている。例えば，アメリカには，英語母語話者も含むすべての高校生を受験対象とする全国共通の大学進学適性試験 SAT（Scholastic Assessment Test）があるが，テスト科目のうち，Critical Reading と Writing といった学生の言語（英語）能力を測る科目は重要な位置を占めている。これは，英語母語話者の母語能力を測るテストとしても大きな意味があると思われる。また，イギリスでは，公認されている義務教育修了試験 GCSE（General Certificate of Secondary Education）があり，イギリスのほとんどの学生は中等教育の終わり，あるいは高校卒業の際にこの試験を受けることになっている。この試験では母語である英語に関する基礎能力が要求されるのだが，その成績は，英国民が就職活動などをする際提示が求められるなど，一生携えていく重要なもので，アカデミックなバックグラウンドの基本的な証明となっている。そして，日本には日本語の総合的な運用能力[3]を測るための「日本語検定」があるが，これは，日本語能力試験 JLPT（Japanese-Language Proficiency Test）といった日本語学習者を対象とする言語テストと比べ，日本語母語話者を主な受験対象としている点が大きな特徴であろう。それ以外に，中国・香港の「香港教師国語能力評価テスト」（Language Proficiency Assessment for Teachers），台湾の「国語表現能力テスト」などが挙げられる。

これらの母語話者を対象とする母語力テストは，母語教育や母文化保持の面にも大きな意味があるが，以下のような特徴があると考えられる。

(1) 卒業や進学の条件の一つとして，学校教育と関連付けられている。例えば，アメリカの SAT やイギリスの GCSE など。

(2) 特定の職業従事者を対象にしているテストが多い。例えば，言語教師の言語能力と専門知識を測るのに，中国香港には教師国語能力評価テストがある。

2.2. 中国国内における母語力テスト

中国国内においては，1980 年代から外国語及び第二言語に関する言語テストの設計，実施と評価に関する理論の検証や，実施状況の報告などが盛んに行われてきたが，母語力テ

3　日本語検定における日本語の運用に必要な 6 つの領域は語彙，文法，語彙の意味，漢字，敬語，表記とされている（日本語検定 http://www.nihongokentei.jp/より）。

ストに対する関心がまだ足りないのは現状である。言語テストに関する研究は,「漢語水平考試 HSK（Hanyu Shuiping Kaoshi）」といったある特定の言語テストや言語項目の測定や評価に関する議論に集中し，中国語母語話者向けの母語力テストの全体像に関する比較研究はまだ少ない。

謝小慶（2009）は「漢語水平考試（HSK）」,「中国少数民族漢語等級考試（MHK）」,「国家職業漢語能力測試（ZHC）」と「漢字応用水平測試（HZC）」を用い，事前予備テスト，統計処理，テスト用紙の作成，DIF（Differential Item Functioning）といった 4 つの面から言語テストのデータベース開発の議論がなされている。しかし,「母語力テスト」は「第二言語／外国語テスト」と同時に論じられながら，言語テストのデータベース構築の基礎研究として位置づけられており，中国における母語力テストの現状と発展についての議論は十分になされているとは言い難い。

一方，日本では，中国国内における母語話者を対象とする母語力テストに関する研究は殆どなされていないようである。国立国語研究所（2006）は，平成 12 年度より 5 年計画で，世界の様々な国や地域で実施されている言語テスト，中でも外国人や移民などの母語話者以外の人々を対象とした言語テストに関して，テストの社会的・歴史的背景，種類・内容，作成・実施過程，社会的影響などの観点から調査研究を行い，その研究成果を『世界の言語テスト』（2006）にまとめているが，中国国内における言語テストの状況については一切紹介されていない。そこから，現在中国国内で実施されている母語テストについては，日本国内ではあまり知られていない現状が伺える。

そこで，本稿では，上述した現状を踏まえ，まず，中国国内で実施されている三種類の母語力テストの現状を概観し，その問題点を考察する。そして，現在中国国家言語文字工作委員会により実施されている「国民言語文字能力評価基準」の研究プロジェクトの設計と実施状況を検討し，日中両国の母語教育や母語力テストの開発と評価に参考となる資料を提供することを目指す。

3. 中国国内における母語力テストの現状

3.1. 母語力テストの必要性と実施背景

言語能力は，言語を用いて思考し，その思考した内容を正確に伝達するという人間の最も基本的な社会的能力の一つであると考えられており，そのうちの母語能力は最も根本的で重要な位置を占めている。母語はその社会・国家・民族の文化と伝統の継承媒体であり，その継承発展はその社会・国家・民族を構成する人々の言語力に大きく依存する。そして，国民の母語能力を向上させられるかどうかは，根本的にはその国の教育の方針によっている。高度な言語運用能力の活動を支える言語中枢は，高度な言語教育によってのみ形成されるものであり，言語テスト，特に母語力テストはその教育に重要な役割を果たすことのできる道具である。言語テストには，言語能力を評価する手段の一つとして，言語学習者の学習方法をよりよい方向へ導く効果が期待できる一方，テストの結果は教育効果の表れとなり，教育カリキュラムの改革や革新を促し，結果として学習者の言語能力の向上に繋

がっていく。

ここで，中国国内で母語話者を対象とする中国語母語力テストが必要である理由をまとめておきたい。

(1) 多民族，多方言の国情：中国は 56 の民族からなる多民族の国であり，総人口の 9 割以上を占める漢民族の中でも母語である中国語の使用に大きな相違がある。漢民族の使用言語の中に，方言は主に 7 種類[4]あり，それぞれの方言は下位分類ができるほか，方言間の相違も著しい。方言の多くは発音や言葉遣いという点から共通語と大きく異なるため，異なる地域間の人々の交流の大きな妨げになっている。

(2) 中国語母語能力の低下の現状：近年，中国人母語話者を対象とする母語能力の調査報告は多く行われ，母語能力の低下に関する関心が寄せられている。常月华（2007），李斌（2010），贺阳ほか（2011）の調査によれば，中国の大学生の母語能力は，特に漢字の読み書き能力の低下，文章表現力の乏しさという点で不足しているという。その原因は，学校教育，特に高等教育において言語そのものについての教育が軽視されてきたことと，情報機器の発達に伴って言語が個人化していったことにあると思われる。

(3) 言葉や文字の乱れを正す必要性：中国は，特に改革開放の 80 年代以来，社会や経済の発展とともに，地域間の交流や人口の移動が著しくなり，また，パソコンやインターネットの普及により，言語文字の運用に関しては，特に普通話の普及や，規範漢字の使用などが深刻な課題になっている。日常生活では，中国語の漢字の誤用や不適切な使用がよく見られ，言葉の乱れを正すことが議論の的となっている。

この 30 年は，中国国内では沿岸部から内陸まで，都市部から農村部まで，幼稚園から大学まで，英語学習のブームが広がってきた。一定の英語能力を身につけ，英語検定で良い成績を収めることは，進学と就職の成功に繋がり，個人の能力を評価するのに大きな指標となってきた。学生達が英語学習に多大の時間と精力を注いできたのは，この社会背景があったためである。この英語学習のブームとはうらはらに，母語教育はこの十数年，非常に軽視されてきたのが現状である。また，一般に外国語学習と母語の習得の関連に関する理解も足りないようである。人間の母語能力は外国語学習の上で非常に大きな影響を及ぼすため，母語能力の高い人は，外国語学習の速度も相対的に速く，また，高い運用能力を身につけることができるが，母語能力の低い人は習得速度が遅い上に，ある一定のところまで達すると，ほとんど進歩しなくなると考えられる。

国民の言語能力が低下している中，中国語母語教育の強化や，言語文字使用の規範化の重要性と緊急性が認識され，国や政府の教育機関は中国語言語能力の保持や発展を主旨とする中国語母語力テストを開発してきた。

2011 年現在，中国国内で実施されている中国語母語力テストは，「普通話水平測試（PSC）」，「国家職業漢語能力測試（ZHC）」，「漢字応用水平測試（HZC）」の三種類である。この三つのテストは，いずれも全部国レベルで実行される標準化言語テストであり，そのうち，

4　中国の方言の分類については，まだ議論されているところであるが，一般的に中国の「七大方言」とは，北方方言，呉方言，湘方言，赣方言，客家方言，閩方言，粤方言のことを指す。

最も早くから実施されてきたのは「普通話水平測試（PSC）」（1994 年）である。2001 年『中華人民共和国国家通用言語文字法』が施行され，その中に「国は普通話の普及と，文字の規範化を奨励する（筆者訳）」と記されていることからわかるように，初めて国は法律のレベルで言語文字管理の重要性を認めたのである。そのため，中国国内で言語文字の規範化に関わる活動や研究会が多く開かれ，言語学者の間でも大きな関心が寄せられるようになった。すでに各省で実施されていた「普通話水平測試」は全国規模で推進され，続いて，「国家職業漢語能力測試」（2004 年）と「漢字応用水平測試」（2007 年）も開発された。これらの母語力テストの実施は，母語の運用能力が評価されることで，国民が母語や母文化に対する学習意欲を取り戻すことを狙いとしている。

3.2. 三つの母語力テストの概要

ここで，前述の三つのテストの概要を表 1 にまとめておく。

表 1　中国国内における中国語母語力テストの概要

名称	普通話水平測試	国家職業漢語能力測試	漢字応用水平測試
略称	PSC	ZHC	HZC
開始年	1994 年	2004 年	2007 年
性質	国に認定された中国語母語力標準化テスト		
実施目的	受験者の普通話の規範化と流暢度を判定し，レベル認定を行う。	特定の職業従事者の言語能力，コミュニケーション能力を判定する。	読み書きにおける漢字使用の規範化，文法の正確さなどを評定する。
受験者	主に公務員，教師，ニュースキャスター，司会者，俳優，大学生及び専門学校の学生	主に政府機関や，事業団体，各大学などに勤め，高等教育を受けてきた人々	主に公務員や編集者，教師と大学生といった日常生活や仕事で文字を扱う仕事に携わる人々
方式	口頭（インタビュー）	筆記	筆記
内容	普通話の発音，語彙と文法の規範化，発話の流暢度。『普通話水平測試語彙表』[5]等を参照	読解力と文章の表現力	『漢字応用水平測試文字表』に記載される 5500 文字の字形，字音，意味及び用法
テスト構成	単音節・多音節語彙の発音，判断問題[6]，短文朗読，命題発話	選択問題と作文	漢字の書き順，字形，字音，意味に関する選択問題と空欄記入問題
レベル	三級六等[7]	初，中，高の三等級[8]	一，二，三級[9]
評価方法	2 名か 3 名のテスターによる主観評価	選択問題は客観評価，作文は主観評価	選択問題は客観評価，空欄記入問題は主観評価
実施状況	2010 年までの受験者数は 3522.46 万人。1996 年から香港（2010 年まで 7.5 万人），マカオで実施開始。2011 年現在シンガポールとマレーシアでも実施。	2009 年 6 月までの受験者数は 10 万人近く。全国 25 省に 200 箇所以上の試験場がある。	2010 年末まで，全国 14 省（区，直轄市）で 9.6 万人が受験。

5　出題基準・範囲は『普通話水平測試普通話語彙表』，『普通話水平測試用普通話と方言の語彙対照表』，『普通話水平測試と方言常用文法差異対照表』，『普通話水平測試用話題』などの文献に詳しい。

6　主に語彙の選択，数量詞と名詞の組み合わせ，語順と表現形式の判断といった 3 種類の問題であるが，地域により，この部分は実施されないこともある。

7　100 満点。一級甲等（97 点以上），一級乙等（92 点以上），二級甲等（87 点以上），二級乙等（80 点以上），三級甲等（70 点以上），三級乙等（60 点以上），等級なし（60 点以下）。

8　1000 満点。高級（800 点以上），中級（600 点以上），初級（400 点以上），等級なし（400 点以下）。

9　800 満点。一級（600 点以上，語彙数 4500～5500），二級（500 点以上，語彙数 4000～4500），三級（200 点以上，語彙数 3500～4000）。

表 1 に示したように，この三種類の中国語母語力テストは，それぞれ独立しており，測定の内容と判定の能力は異なっている。「普通話水平測試（PSC）」と「漢字応用水平測試（HZC）」は中国教育部と国家言語文字工作委員会により，当時の社会ニーズに応じて開発された国家標準化言語テストであり，政府機関や企業で特定の職業に従事する人たちの中国語母語能力のレベル判定をすることで従事者の中国語能力を一定の水準に保つことを目的としている。「普通話水平測試（PSC）」では受験者の発音や，読み方の正確さといった発音の側面が重視され，普通話での口頭表現の規範化と発話の流暢度の向上を目指している。一方，「漢字応用水平測試（HZC）」は，主に受験者の漢字の書き順，読み方の正確度や，意味の理解と運用能力を測定する。「国家職業漢語能力測試（ZHC）」は，中国の人的資源・社会保障部により，「職業核心能力[10]」（1998 年）という概念に基づき，仕事でよく言語文字に関わっている編集者や，大学教師といった人たちの読み書き能力を測定するために，開発された標準テストである。

3.3. 考察

本節では，3.2 で紹介したテストの問題点についてまとめる。

3.3.1. 主観評価による誤差

「普通話水平測試（PSC）」全体や，「国家職業漢語能力測試（ZHC）」の作文問題，「漢字応用水平測試（HZC）」の空欄記入問題は，テスターが採点基準により受験者の母語能力に対して主観的な判定を行うという点が共通している。周知の通り，客観評価と比べ，主観評価は実施コストが高く，効率が低いほか，テスター自身の言語知識，経歴，その時の心的要因などにより，評価の信頼性が疑われるという問題点がある。主観評価による誤差は避けられないが，テスト評価の結果の信頼性を高くするには，テスターへの研修，集団評価，ダブルチェックなどが行われ，コンピューターによる評価システムの開発にも力が入れられている。しかし，どの対応の仕方にしても，採点・評価基準の精緻化が最も重要な課題であろう。「漢字応用水平測試（HZC）」の空欄記入問題を例にすると，漢字表記の仕方はアルファベット表記と比べ，特殊性があり，漢字の構造，部首，書き方から全体像まで，詳細な採点基準が必要となる。この採点基準は普遍性が求められる一方，柔軟性も要求され，テスターによる判定結果の安定性が大事であろう。しかし，実際に採点を行うとき，正答と誤答の境がどうしても明確でない場合もある。主観評価による誤差を最小限にするには，大量のサンプルデータ収集と精緻化とその下位分類が必要なほか，実際のテスト採点の際，採点基準の検証と調整が必要であろう。これはどの言語テストにも共通する課題であると思われる。

10　「職業核心能力」とは，コミュニケーション能力，数字応用能力，情報処理能力，協調性，自立学習能力，実践革新能力，外国語の能力からなると規定されている（中国語職業核心能力網 http://www.hxnl.cn/より）。

3.3.2. レベル分けの問題

「国家職業漢語能力測試（ZHC）」と「漢字応用水平測試（HZC）」には，到達レベル数が少ない，レベル間の点数の幅が広い，という問題がある。例えば,「国家職業漢語能力測試（ZHC）」には，初，中，高の三つのレベルがあるが，どのレベルの間にも 200 点の差がある。例えば 800 点から 1000 点の間は全て「高級」と認定されるが，800 点しか取れない受験者と, 950 点以上の受験者とでは, 実際の言語運用能力がはるかに違うかもしれない。このように，点数の幅を大きくすることは，同じレベルの受験者の間の能力差を把握できないほか，次のレベルに挑戦するという受験者のモチベーションにも影響を与えると考えられる。現在「普通話水平測試（PSC）」では，初級レベルに，初級 1，初級 2，初級 3 という下位分類が行われている。もちろん，単なる点数をレベル分けの基準にするのではなく，統計データを科学的に分析することは必要不可欠であろう。

3.3.3. ペーパーテストの限界

「国家職業漢語能力測試（ZHC）」と「漢字応用水平測試（HZC）」は現在ペーパーテストにより実施されているが，テストを実施するには，場所と時間が制限され，さらにテスト用紙の作成や管理，また実施のための人件費などでコストも高い。そのため，コンピューターとインターネットによる大規模テストのシステム開発の試みが, 急務となっている。このような流れを受け,「漢字応用水平測試（HZC）」では，2009 年から中国の一部地域において少人数の受験者を対象に，コンピューター化されたテストの実験的試みが行われているのだが，その効果は，現在検証中である。

3.4. まとめ

以上,「普通話水平測試（PSC）」,「国家職業漢語能力測試（ZHC）」と「漢字応用水平測試（HZC）」の三つの中国語母語力テストについて概観し，分析と考察を行った。これらの試験は，国民の言語文字の運用能力を促進するのに重要な役割を果たしている。しかし，現在実施されている状況からみると，以下の三つの問題点が指摘できると思われる。

(1) 現在の母語力テストは特定の言語能力（普通話の口頭能力など）を測ったり，教師や新聞記者などのような特定の職業従事者を対象としているため, 中国語運用能力の全体, つまり総合的な力を測るテストにはなっていない。

(2) 今までの母語力テストに関する研究は言語テストのツールの開発に傾き, 多角的に異なる言語レベルの中国語母語話者の言語機能の記述研究はまだ少ないため, 国民の言語文字の運用能力に関する分析や評価はまだ十分に行われていない。

(3) 現在の言語テストはそれぞれ独立しているため関連性に欠けているほか, 中国語母語話者の母語能力を総合的, 体系的に評価できるシステムの開発と設計に関する議論はまだ少ない。

以上から，現在中国国内における母語力テストの現状を考えると，実際の言語テストから独立した，全ての中国語の母語話者を対象とする言語能力や読み書き運用能力に関する

評価基準の構築は，非常に意味があると思われる。次節では，その新しい動向として，中国国家言語文字工作委員会による「国民言語文字能力評価基準研究」のプロジェクトを取り上げ，これまでの調査研究の結果とこれからの研究計画について紹介していく。

4.　「国民言語文字能力評価基準」研究プロジェクト

4.1.　プロジェクト構想

「国民言語文字能力評価基準」の研究プロジェクトは，中国国民の言語文字，特に国家通用言語文字[11]の運用能力と水準を記述及び評価できる，全面的かつ基礎的な評価システムの構築を目的としている。この評価システムは，言語能力の低い人から言語の専門家まで，中国語を母語とする全ての国民を対象にしており，多方面から，多角的に，国民の言語能力を評価できるシステムである。また，精緻化かつ標準化された言語能力指標により構成することにより，縦断的には異なる言語能力の受験者や職業従事者の国家通用言語の運用能力と水準を評価できる一方，横断的には国家の公用語である普通話の運用能力の全体を評価できるほか，「聞く」「話す」「読む」「書く」という四技能別に評価することもできる。

この評価システムでは，言語要素と言語知識に対する理解度を重視するが，実際の言語生活における言語の運用能力を重視する。そのため，その能力指標として具体的な言語環境と使用場面における言語運用能力とその評価基準が記述されているほか，ヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR[12]（Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment）の影響も受けており，具体的なタスクを遂行させる内容も含まれている。そうすることにより，ある母語話者の身につけた言語知識を把握できるほか，その言語知識を用いてどんなことができるかをも説明できるものである。

要するに，この評価システムは，基本的な評価参照枠で，具体的な言語テストとは独立しているが，各言語テストの開発と設計の方針となるものであり，四技能に関する評価ツールや，特定の職業従事者を対象とする言語テストは，このシステムにおける各言語レベル，言語技能の指標を精緻化した上で開発が可能となる。

4.2.　これまでの研究調査

中国語は，中国で共通して用いられている言語とはいえ，中国は国土が広く方言が多いため，地域，職業，社会文化により，言語使用上の差異や特性が見られる。この差異は，言葉遣いによるものもあれば，文化，認知面によるものもあると思われる。後者は中国大陸の住民と，香港，マカオ，台湾に在住の市民による言語使用上の差異に顕著である。同

11　「国家通用言語文字」は,『中華人民共和国国家通用言語文字法（2001)』で規定される「普通話」と「規範漢字」のことを指す。普通話能力は「普通話水平測試（HSC)」で測ることができ，後者の規範漢字の出典は『簡化字総表』(1986),『第一批異体字整理表』(1955),『現代漢語通用字表』(1988）等がある。

12　詳細は，吉島茂・大橋理枝（訳・編）『外国語教育Ⅱ－外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠－』(2002 朝日出版社）を参照されたい。

じ中国語圏の内部にあるこのような差異を研究して，言語使用における共通の基準を見出すため，すべての中国語の使用者に適応する中国運用能力の統一した基準を構築することに重要な意味があると考えられる。ここでは，まず中国の現状を踏まえ，言語使用上の差異を引き起こす要因をまとめておく。

(1) 地域・方言による相違：同じ言語「漢語」使用者であっても，地域の差による方言の相違は音韻，言葉遣いと文法などといった言語面で顕著に現れているが，最も大きな違いは発音である。例えば，普通話と殆どの北方方言には声調が 4 つあるが，湘方言，赣方言，客家方言には 6 つ，閩方言には 7 つ，粤方言には 9 つもある。

(2) 職業による相違：基本的労働習慣や仕事上必要となる技能の習得状況から影響を受け，異なる職業，例えば医療関係と土木関連の従事者の一般語彙と基本語彙の運用状況や，表現習慣，話し言葉と書き言葉に関する言語の特徴などといった言語使用上の様々な面で，相違が見られる。例えば，処方箋やショック，血栓，動脈硬化などは医療業界の用語であり，玄翁や水糸，はめ殺し，勾配などは大工の専門用語である。そのため，職業別に言語能力の評価基準を作るとき，その職業従事者はその専門用語の読み書きができるかどうかが大きな評価の要素となる。しかし，どの職業でも，その専門用語を読めるだけでなく，「書く」ことも必要だというわけではないため，テストを設計する際に，専門別に考慮すべきであろう。

(3) 社会や文化による相違：地域や職業別による言語面の差異とは違い，異なる社会や文化に生きている人たち，例えば，中国内陸と香港，マカオ，台湾の人々の間では，言語形式より認知面による相違がもっと大きい。この違いは，言語使用習慣や言語形式に顕著に現れているが，根本的には歴史，政治制度，文化背景，社会環境など様々な要因により，一つの物事に対する異なる理解や思考法によるものである。いくつか例を挙げてみよう。同じ物事に対して，日常生活でも異なる言い方をとっている。例えば，同じエレベーターのことでも，香港では「升降机」，内陸では「电梯」と呼び，ウェートレスのことは香港では「侍应生」，内陸では「服务员」と呼んでいる。また，一つの語彙が表す意味に対する理解が異なる場合もある。例えば，内陸と全く違って，香港の人にとって「批评学生（学生を叱ること）」は「骂学生（学生をののしること）」より程度がひどい感じがする，という。

以上の差異及びその要因を認識した上で，これまでの中国語母語力テストに関する二つの実践研究，「中国語空所補充問題の研究[13]」と「特定の職業従事者を対象とする中国語能力調査研究」の実施状況を紹介する。この二つの実践研究は，今回の「国民言語文字能力評価基準」の構築に重要な基礎を築いている。

4.2.1. 中国語空所補充問題の研究

空所補充問題は外国語の試験の中でよく使われるものであるが，今回は香港と中国大陸

13　香港理工大学と中国・教育部言語文字応用研究所との共同研究プロジェクト，「中国運用能力測定可能性調査」の一部となっている。

の高校生を対象とする中国語文章表現能力の測定テストに導入し，多項目選択問題との関連付けを試みた（富 2009）。テストは両地域で同時に行われ，社会文化背景の相違による言語表現上の違いを考察することを目的とした。結果として，社会文化の相違による言語使用上の違いが，用語の選択や，表現の習慣，文法項目の使用などの面でよく見られた。また，他の中国語圏と比較して，現地の日常生活に近い言語問題に対して，より良い成績を収めたという結果が観察された。

例えば，2008 年に中国内陸と香港で同時に実施されたパイロット調査の中には，以下のような空所補充問題があった。中国内陸の調査協力者のよく使う言葉は,「逊于，亚于，输，落后于」（劣る，ひけをとる，負ける，遅れる（筆者訳））の順序であるが，香港地域の人たちは「逊于，次于，少于，败于」（劣る，…に次ぐ，少ない，負ける（筆者訳））となっている。

例：在下划线处填写适当的词汇。（下線のところに，適切な言葉を入れてください。）
“中国人的勤劳不＿＿＿西方，可财富却落在西方之后。”
「中国人の勤勉さは西洋人に＿＿＿ないが，富は西洋より劣っている。（筆者訳）」

上記のように,テストの問題に香港と中国大陸の異なる言語資料を導入することにより，受験者の異なる言語環境におけるコミュニケーション能力を考察することができた。中国大陸の受験者にとっては，実際の内陸の言語生活と異なる香港と台湾の言語資料は難しいが，前後の文脈や言葉により適切な語彙を記入できた人が多い。また，書かれた言葉は正解と異なる場合もあったが，文章の意味理解に殆ど影響はない。香港の受験者の場合も同じ結果である。つまり，香港と中国大陸とは，言語表現の形式が異なるにしても，言語規則が共通し，言語運用能力も共通したものがある，という結果が見られた。

中国内陸と香港で実践されたこの研究は，空所補充問題が中国語文章表現能力テストに応用できる可能性を探索できたほか，今回のテストを通して社会のトップにあるエリートの中国語運用能力を測定することができた（富 2009）。また，香港と中国大陸の社会文化の差異によるテストの特殊性も概観できたと思われる。この研究は，国民言語文字能力評価基準の基礎研究となる。

4.2.2. 特定の職業従事者を対象とする中国語能力調査研究

特定の職業従事者を対象とする中国語能力調査研究は質問紙調査によるパイロットテストの形で行われた。我々は，まず関連している職業従事者や学生の中国語母語能力の現状について，数回の研究会を重ねてきた。そして，調査協力者により，政府機関，一般事業団体，各レベルの学校の教員と学生を対象とした三種類の質問紙を設定した。質問項目は選択問題であるが，評価の形式は，教師や上司といった上位者に下位にある学生や部下の母語能力を評価させる，上から下への他者評価の形にした。調査内容は，中国語母語能力の全体像を評価する項目と，聴解，口頭，読み書き，読解などの特定の技能を評価する項

目に分けた。異なる職業では，部門により要求される言語能力も異なり，異なる専門分野では，学生には異なる言語能力が要求されると想定されている。同時に，国内外における読解と作文に関する調査研究の成果（張 2009）を参考にし，中国語の特殊性を踏まえながら，読解と作文に関する言語能力のテストの枠組みを作成した。

また，「読解」の機能と特徴と，実際の言語生活に関わる読解の場面を考え，速読と普通読解の二種類の読解問題を作成した。速読では，文章から情報を速くかつ正確に読み取る力と，情報の検索と認識，比較の力を考察する。普通読解では，説明文，小説などの材料を中心に，内容についての分析，要約，理解と評価の力を考察する。そして，「書く」力を測るテストについては，文章表現力の範囲と指標を確定し，問題の設定は，実際のコミュニケーション場面との結びつき，応用性と場面のバラエティを増やすように努めた。例えば，募集要項により履歴を書くこととか，会話と写真の内容により捜し物の広告を作成することなどがある。

これらの読解や作文の問題には，習熟度テストの特徴が反映されている。また，全面的かつ確実に調査協力者の読解と作文の能力を評価するため，質問の内容は全て現代中国語コーパス[14]から引用し，人々が日常生活で触れそうなあらゆる場面や題材を考量し作成された。このように，意識調査と言語力調査で特定の職業の人々の中国語母語運用能力を把握し，また，等級基準の作成に根拠を提供して，「国民言語文字能力評価基準」の開発に関する基礎研究となるべきものである。

母語能力に関する国民の自己評価の希望に応じ，「国民言語文字能力評価基準」の構築は，人々が言語能力記述指標との比較を通して個人の言語能力を把握できることを可能にする一方，人々が評価結果により学習計画を立て，自律学習のモチベーションを高める役割も果たすことも目指している。また，この統一指標と枠組みを使って，評価結果を比較すれば，異なった中国語母語能力テストの開発に対し，適切な位置づけができる。そして，現在の中国語教育のカリキュラムやシラバスの改善をより規範的，効率的に行う上で，大きな役割を果たすことが可能である。このように，この評価体系の構築は，基礎的な研究であるが，普遍的な学術価値があるほか，社会の発展にも大きな影響を与えることが期待される。

4.3　今後の計画

「国民言語文字能力評価基準研究」は，今後以下の 5 つの内容を中心に進めていくことになっている。

(1) 応用言語学の分野での関連資料，特に影響力のある言語能力評価基準（ヨーロッパ言語共通参照枠 CEFR など）を参考にし，中国語言語文字の特殊性を考慮しながら，言語文字の運用能力に関する定義と内容を明確化し，言語文字の運用能力基準を設定するための理論的根拠を提供する。

14　現代漢語語料庫 http://china.fl.kansai-u.ac.jp/

(2) 主に小・中学校，専門学校や大学の学生と，特定の職業に従事する人たちを対象とする質問紙調査を通して，国民による国家通用言語文字の使用状況を把握する。また，調査協力者間での比較を通して，それぞれの言語文字運用能力に関する特徴と規則を整理し，能力指標の設定に根拠を提供する。そして，異なる職業では，言語面において従業員に対し，どのような要求と期待がされているかを解明し，現実とのギャップを明らかにする。

(3) 中国語の言語資料による文字，語彙の統計処理を行い，コーパスの構築に努める。また，異なるコーパス間のデータ比較を通して，文字や語彙の出現頻度や分布状況を指標に，言語文字の知識体系からレベル別の能力記述基準の作成に客観的なデータを提供する。

(4) 中国語教育のカリキュラムやシラバスについて分析し，その研究成果のレベル分けを言語能力別に行う際に，その設定基準の参考データにする。

(5) 中国運用能力測定可能性調査，漢字応用水平測定研究，普通話水平測定研究及び APP（the Advanced Placement Program）（アメリカ）及び，香港地域教師国語能力評価システムなどの研究の方法と経験を踏まえ，比較，選別，補足，整備を行い，言語文字能力の評価システムの原形を形成する。

上述した 5 つの内容はこれまで十数年間に亘り次第に展開され深められてきたものであるが，この研究プロジェクトは，一貫性と序列性を保つ評価基準の構築に重点をおき，各言語機能に配慮しながら，同じ評価基準を用い，各レベル間の差異を明確に記述できることを目指す。そして，能力記述に用いられる場面や状況は，できる限り実際の調査協力者の言語生活に近い場面にするが，集団を代表するサンプルの収集が困難点の一つである。

4.4. 結果の予測

上述した研究成果を踏まえながら，全体から中国国民の言語文字運用能力に関する評価基準の枠組みを作成していく。そして，各レベル及び四技能別の単独項目の能力指標を記述することにより，縦断的なレベル分けと，横断的な能力記述を同時に取り入れられ，言語知識を言語技能に結びつけられる，総合的な評価システムを構築することを目指す。

「国民言語文字能力評価基準」は，開放的かつ継続可能な評価システムであるため，各レベル及び各言語項目に関する能力記述の内容は，新しい研究成果の発表や実際のニーズに合わせて，精緻化されうる一方，母語（中国語）教育と言語学習，及び言語能力評価ツールの開発の指標になることが期待できる。また，国民全体の言語運用能力に関する定義と記述ができれば，国家レベルの言語戦略の作成に大きな意味があり，また，特定の分野や特定の職業従事者を対象とする言語運用能力に関する評価と記述があれば，異なる分野や職業の社会ニーズに合わせ，その業界における言語使用基準の作成にも参考になる。そして，言語学習者自身による自己評価もでき，自律学習を促すことも可能である。

5. 終わりに

本稿では，中国国内で実施されている「普通話水平測試（PSC)」,「国家職業漢語能力測試（ZHC)」と「漢字応用水平測試（HZC)」といった中国語母語力テストの実施状況について，考察と分析を行った。現在，中国母語力テストはまだ開発段階にあり，特定の言語能力や特定の職業内では，有意義な試みはなされてきているが，理論の検証及び実践の研究にはまだ整えなければならないところがたくさんあると思われる。本稿で紹介した「国民言語文字能力評価基準研究」は，中国語母語能力の評価システム構築により，中国国民の母語能力の参照枠となるべきものである。2011 年現在，このプロジェクトは始まったばかりであるが，国内外の各言語能力試験を参照し，言語学，教育学，統計学，計量言語学などの分野の研究成果を活かし，理論と実践検証の結び付けを積み重ねていかなければならない。

【謝辞】

本稿の執筆にあたり，ご多忙の中，真嶋潤子先生には多くの貴重なコメントをいただきました。また，吉兼奈津子さんに詳細なネイティブチェックをしていただきました。ここに記して，心より深く感謝いたします。

参考文献

＜日本語文献＞

宇佐美裕子，2007,「コーパスの言語テスト作成への応用」,『桐朋学園大学研究紀要』33.

国立国語研究所，2006,『世界の言語テスト』，くろしお出版.

Shimada Megumi, 2006,「日本語聴解テストにおいて選択肢提示形式が解答過程に与える影響--発話思考法を用いて」,『研究紀要』9，日本言語テスト学会.

島田拓司，2006,「項目応答理論(IRT)を応用した言語テストの研究－死角はないのか？」『外国語教育』32，天理大学言語教育研究センター.

野口裕之・熊谷龍一，2007,「日本語 Can-do-statements における DIF 項目の検出」,『研究紀要』10，日本言語テスト学会.

フォード丹羽順子，2007,「言語テスト「SPOT」の WEB 版・用紙版の比較」,『佐賀大学留学生センター紀要』6.

藤田智子・柳川浩三，2009,「妥当性を考慮した言語テストの作成と項目応答理論を利用した分析」,『Dialogue』8.

吉島茂・大橋理枝（訳・編），2002,『外国語教育 II－外国語の学習，教授，評価のためのヨーロッパ共通参照枠』，朝日出版社.

吉田弘子，2009,「英語プレイスメントテスト分析 - 言語テストの観点から」,『大阪経大論集』60 (2).

＜英語文献＞

Enhancing the Teaching and Testing of Mother Tongue Languages (MTL) to Nurture Active Learners and Proficient Users - MTL Review Committee Releases Its Recommendations（2010）Ministry of Education, Singapore.

Melissa Bowles, & Charles W. Stansfield, 2008, Standards-Based Assessment in the Native Language: A Practical Guide to the Issues “NLA-LEP Partnership”Department of Education (ED), Washington, DC.

Sugita Yoshihito, 2009, 「Developing and improving rating scales for a task-based writing performance test」『研究紀要』12，日本言語テスト学会.

Takaki Shuichi, 2010,「Investigating EFL learners' mental representations with the verb-clustering test」『研究紀要』13，日本言語テスト学会.

＜中国語文献＞

常月华（2007）《大学生语文能力现状调查与分析》，《郑州大学学报》第 3 期

陈菲，富丽，张一清，孙曼均（2011）《汉字应用水平测试书写题阅卷规则初探》《语言文字应用》第 1 期

富丽（2009）《中文完形填空选篇，删词及选项设置原则研究》《语言文字应用》第 4 期

富丽，陈菲（2010）《建立泛中文背景下的中文应用能力测评体系的构想》《2009 中国—欧盟合作研讨会论文集》外语教学与研究出版社

贺阳，徐楠，王小岩 《高校母语教育亟待加强—基于海内外十余所高校的调查分析》《 光明日报 》2011 年 1 月 11 日

李斌 《调查显示大学语文教育仍在低谷》《中国青年报》2010 年 10 月 21 日

宋铭（2008）《国家职业汉语能力测试的设计理念》《中国职业技术教育》第 11 期

孙曼均（2004）《汉字应用水平测试用字的统计与分级》《语言文字应用》第 1 期

佟乐泉（2008）《汉字应用水平测试培训手册（修订版）》广东教育出版社

王晖（2003）《普通话水平测试研究的现状及构想》《澳门语言学刊》第 20 期

谢小庆（2009）《HSK，MHK，ZHC 和 HZC 的题库建设》《发皇华语，涵泳文学—中国文学与华语文教学学术研讨会论文集》台湾文津出版社

张晋军（2006）《国家职业汉语能力测试（ZHC）改进设想》《考试研究文集（第 3 辑）》经济科学出版社

张一清（2004）《汉字应用水平等级标准》研制报告《语言文字应用》第 1 期

张一清（2005）《“汉字应用水平测试”的缘起和发展》《语言文字应用》第 3 期

张一清（2009）《建立中文应用能力测评系统的构想和思考》《语言文字应用》第 2 期

中华人民共和国国家语委普通话培训测试中心《语言文字应用》编辑部(1998)《普通话水平测试的理论与实践》商务印书馆

中华人民共和国国家语言文字工作委员会普通话培训测试中心（2005）《普通话水平测试实施纲要》商务印书馆

中华人民共和国教育部国家语言文字工作委员会（2006）《汉字应用水平等级标准及测试大

纲》广东教育出版社
中华人民共和国劳动和社会保障部职业技能鉴定中心北京华美杰尔教育研究所（2004）《国家职业汉语能力测试大纲》法律出版社

関連 URL（最終アクセス 2011 年 12 月 12 日）

日本語検定　http://www.nihongokentei.jp/
日本漢字能力検定協会　http://www.kanken.or.jp/
日本語能力試験　http://www.jlpt.jp/
中国教育部言語文字応用研究所　http://www.yys.ac.cn/
中国漢語水平考試　http://www.hsk.org.cn/
中国職業核心能力網　http://www.hxnl.cn/
中国言語文字網　http://www.china-language.gov.cn/
国家職業漢語能力測試　http://www.zhc.cn/
ヨーロッパ言語共通参照枠　http://www.culture2.coe.int/

(2012. 01. 12 受理)